

サハリンとその周辺地域のハクチョウ

V. A. Ostapenko

サハリンは2種のハクチョウ、コハクチョウとオオハクチョウの主要な渡りルート上にある。しかし最近までこの地域におけるハクチョウ類の渡りに関して断片的な報告が文献にあるだけであった。

私はサハリンにおける春の渡り時期の長さ、相対数、休息地について調査した。この研究は春と秋の渡り時期の西カムチャッカ、南千島、南プリモリーエにおける調査によって始まり、ハクチョウ類の渡りが、他の水鳥と同時に調べられた。

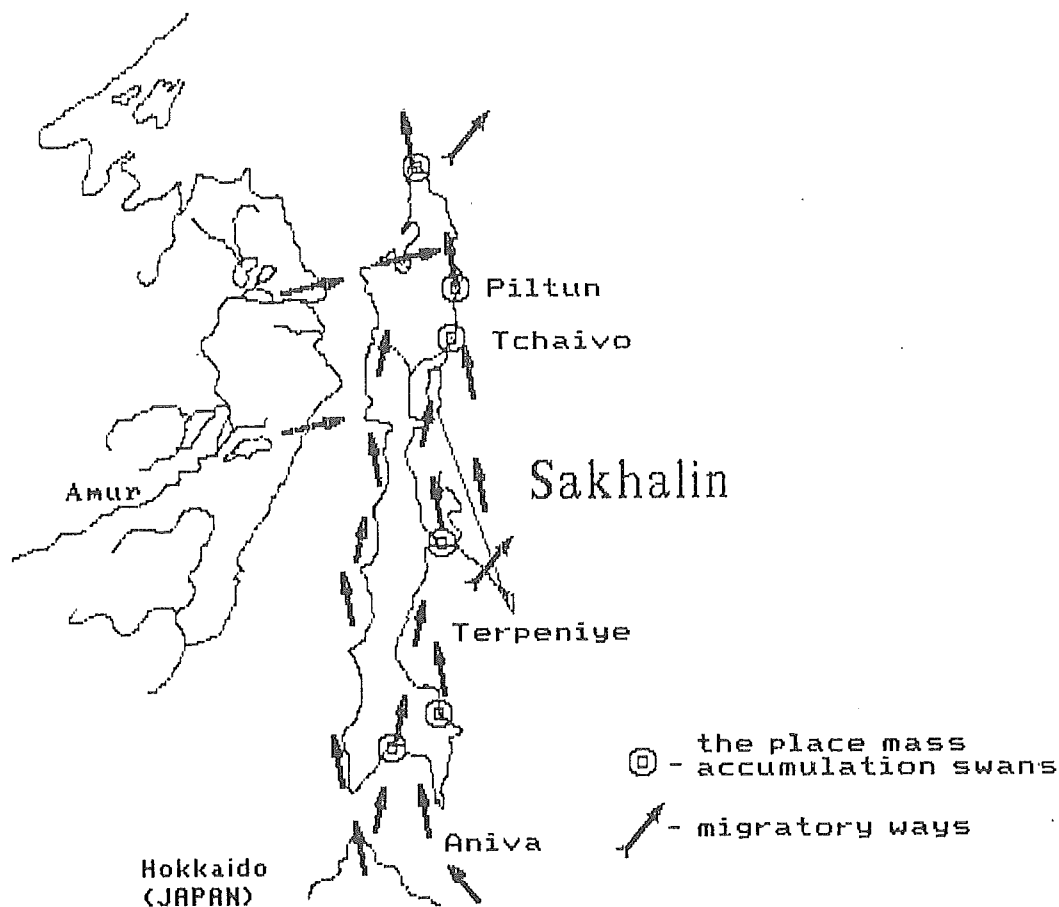
ギゼンコ(1955)は、サハリンを通過するハクチョウ類の春の渡りルートを二つ、すなわち第一はサハリン西部海岸と第二はアニワ湾、ブッセ潟(遠瀾湖)を通り東沿岸、テルペニア湾(多来加湾)までのルート进行を明らかにした。私はアニワ湾沿岸、ブッセ潟、ツナイ湖(富内湖)のような最南部、またサハリン北東部のピリツン湾を調査し、同時にヘリコプターを用いて(5回)北部全域を調べた。調査を1987年4月16日～5月15日と1988年5月3日～6月1日に行なった。1987年の調査期間中のユジノ・サハリンスク空港から得たレーダー観測資料、またサハリンの動物学者の狩猟官からの聞き込み資料がある。

サハリン南部で最初のハクチョウ類が出現するのは3月末～4月初めである。例えば、最初の群がアニワ湾で見られたのは1978年には3月28日、1987年には4月4日である。もっとも集中するのはアニワ湾～ロソセイ湾の浅瀬である。湾内の底部は泥土でおおわれ、アマモ(*Zostera*)が多く、湾の大部分は4月にはまだ氷におおわれているが、開水面や氷上には多くのハクチョウ類やカモ類がいる。例えば、1987年4月21日にオオハクチョウとコハクチョウの全数は1,000羽に達し、4月22日には約3,000羽が記録された。4月24日にコルサコフ(大泊)市の東15Kmを7羽の群が飛び、この集結地へ向うのを観察した。4月25日にロソセイ湾ですでに3,800～4,000羽が数えられた。その25%はコハクチョウであった。ハクチョウ類の飛来は続き、ロソセイ湾(千歳湾)で最大数は1987年5月1日に約6,000羽が記録された。ここにはほぼ同数のカモ類がいる。

ハクチョウ類の北方への最初の動きはレーダー観測で明らかになる。1987年4月20日に最初の群がユジノ・カムイシエフ山脈(樺太山脈)東支脈の湿潤な谷を飛んだ。飛行は南東から北西へ高さ600mであった。1987年4月27日10時30分～10時50分にロソセイ湾沿岸のソロヴィエフカ付近(新貝塚付近)で行なった目視観測で16～23羽の6群と5～7羽の5群を数えたが、これらは湾から飛び立ち、200～300mの高さで上述の山脈東支脈沿いに谷上空を北へ飛んだ。この日の夜の気温は0℃、日中は7℃であった。1987年4月29日8時15分にユジノ・サハリンスク空港で高さ50mを北東に飛ぶ2群のハクチョウ類を記録した。空港付近で多くのハクチョウ類が飛ぶのは5月2日の朝にみられた。ハクチョウ類は高さ150mで北へ飛んだ。この日の気温は16℃であった。5月第1週いっぱいベアンワ湾からはほぼ全部のハクチョウ類がいなくなった。

このようにサハリンでハクチョウ類は海岸沿いだけでなく、陸上の平野部も飛ぶ。これらのハクチ

ョウ類の流れは、ロソセイ湾に始まり、ユジノ・サハリンスク西端沿いにシネゴルスク（川上）とドリンスク（落合）に向い、スタロドゥップスコエ〜ソヴェトスコエ地域（相浜あたり）でオホーツク海沿岸に出る。ここでブッセ渦、ツナイチャ湖、サハリン東海岸沿を通過する小さな群と合流するようである。4月にツナイチャ刻に80羽のハクチョウ類が飛来するが、ここでオホーツク村の人々が給餌をする。毎年ハクチョウ類はここに留まり、人を恐れない。



サハリン北部でハクチョウ類が大量に集まる所はピリツン湾とチャイヴォ湾である。例えば1987年5月8日ピリツン湖北西部での86Kmにわたるヘリコプターによる調査では、ここにハクチョウ類 5,000羽があり、氷のない開水面に50~200羽から3,000羽（一つの集団）の集団でいた。1988年5月17日に行なった調査ではチャイヴォ湾に少なくとも2,000羽、ピリツン湾に1,600羽がいた。大量の渡りが1987年5月6~10日に記録された。観察地点はピリツン湾のポチェムバグシュ岬である。湾内で氷がないのは岸沿いの幅10~100Kmの範囲で、他は氷におおわれていた。夜にはやや寒く、日中は気温5~10℃であった。暖かな南風が多いが、渡りは北風でも無風のときでもみられた。ハクチョウ類の群は7時20分~22時の明るい時に記録され、夜間の渡りはまったくみられない。渡りのピークは8~9時と20~22時で、15~17時には少ない。1種の群でも2種の混群でも渡った。これらの群の大きさは3~5羽から60

～70羽である。群の平均の大きさは 12.33 ～ 18.95羽と日によって異なり、全体の平均は 1群で 15.26羽であった。全てのハクチョウ類は20～60mの高さを北に向かって飛んだ。4日間で全部で3,200羽のハクチョウ類を記録したが、そのうち種の識別できたのは461羽で、35%がオオハクチョウ、65%がコハクチョウであった。1987年5月14日にはここを1,439羽のハクチョウ類が北へ飛んだ。1988年の5月前半にはこのような北へ向う大きな群は見られなかった。ハクチョウ類は多くは氷のない水面におり、北へ南へと飛びまわっていた。ピリツン湾から大量に渡去したのは1988年5月20～21日の夜であったが、つがいや小さな群が5月末まで見られた。1988年5月27日に北サハリンの全沿岸をヘリコプターで調査したが、7羽がみられただけであった。以前この地域ではオオハクチョウが繁殖した(ギゼンコ 1955)。

サハリンの西岸と東岸にある渡りルートは多分サハリン北部で一緒になり、またハンカ湖やアムール川下流部を通る大陸ルートもここで合流すると思われる。例えば、1988年5月23日にヴォストチナヤ湾のオハ市付近で西から東へ向う約100羽のハクチョウ類が観察された。

かつてサハリンを通過したハクチョウ類は5,000羽とされているが(ギゼンコ 1955)、30年以上後には15,000羽以上はいる。このことはハクチョウ類の極東の個体群が増大していることを示している。標識により、本州や北海道で越冬し、アジア北東部のコリマ川流域やチャウン低地で繁殖するハクチョウ類は主にサハリンを通ることを示している(キンズスキー 1979, フンドラーチェフ 1984, オスタペンコ 1985)。これと関連してとくに興味あるのは1977年8月17日にチュコトのチャウン地域で幼鳥のときに標識された個体が、1979年5月20日にチャイヴォ湾のヴァル川河口で見つかったことである。サハリンを通るコハクチョウはツンドラ地帯で繁殖するが、オオハクチョウはマカダン州南部やヤクーチャで繁殖すると思われる。例えば1970年2月14日に日本の茨城県で標識されたオオハクチョウ成鳥が、1973年5月25日にスレドネコリムスクから70Kmにあるサンガラク村で見られた。千島列島を通過してカムチャツカに渡るのはオオハクチョウだけであることを述べておく必要がある。カムチャツカ州北部のペンジナ川沿いとバラボル谷では渡りのときにオオハクチョウとコハクチョウが見られる。その数は数百羽以下である。多分ペンジナ川は、コハクチョウにとってはサハリンとチュコトをつなぐ役割をもっているが、両種のハクチョウの主な渡りは、サハリンからコリマ川沿いを通る。

まれにサハリンでは渡り時にアメリカコハクも見られる。ギゼンコ(1955)はアノワ湾で1948年4月に採集された標本について報告している。アメリカコハクは日本でも越冬することが知られている。

この論文は昨年12月、英国オックスフォードで開催された第3回国際白鳥シンポジウムで発表されたものである。モスクワ獣医学アカデミーのオスタペンコ氏の好意により掲載することができたものである。なお、旧日本名は松井が訳した。

文 献

- ギゼンコ, A. I., 1955. サハリン州の鳥類。ソ連科学アカデミー出版, 328 P.
- キンズスキー, A. A., 1979. コハクチョウの渡り。東ヨーロッパと北アジアの鳥類の渡り, コウノトリ目～ガンカモ目, 75～79.
- コンドラチェフ, A. Ya, 1984. 東シベリアのコハクチョウ (*Cygnus bewickii jankowskii* Alph.) の渡りと日本における越冬。ゾーロギチェスキ・ジュルナル, 63(12):1835～1847.
- オスタペンコ, V. A., 1985. ソ連東アジア地域における鳥類の渡りルートと分布。博士候補論文, モスクワ, 255 P.

[訳: 藤巻 裕蔵]